在日米海軍司令官様

米海軍横須賀基地司令官様

イージス駆逐艦「ハワード」と「ヒギンズ」の横須賀配備に抗議し、

追加配備計画の撤回を求めます。

2021.8.22

ゲート前抗議スタンディング参加者一同

ヨコスカ平和船団

非核市民宣言運動・ヨコスカ

　8月16日、イージス駆逐艦「ハワード」（DDG83）と「ヒギンズ」（DDG76）が新たに米海軍横須賀基地に配備されました。読売新聞（2021.8.17）によれば、さらに年内に2隻の追加配備が計画されており、2月4日に配備された「ラファエル・ペラルタ」を入れると、1年に5隻のイージス艦が横須賀を母港とする、過去に例がない異例の事態です。

　「マスティン」（6.22本国帰還）、「カーティスウイルバー」（8.18本国帰還）、「ジョン・S・マケイン」（2021年内帰還予定）3艦の横須賀除籍を計算しても2隻の増艦となり、「可能な限りの返還」を求める横須賀市の「基本計画」に逆行する基地の強化であることは明らかです。

　新配備の駆逐艦は「共同交戦応力など、最新鋭の対空戦、対艦戦能力」（読売、8.17）を持つイージス艦で、1996年から2006年に配備された帰還する3艦との戦闘能力の違いは明らかです。数だけではなく、質的にも強化される一連のイージス艦の横須賀配備を断じて認めることはできません。

　横須賀が先制攻撃の町であることを拒否する私たちは、イージス駆逐艦「ハワード」と「ヒギンズ」の横須賀配備に抗議し、追加配備計画の撤回を求めます。

●

　4月16日に発表された「日米首脳共同声明」では、「南シナ海におけるあらゆる一方的な現状変更の試みに反対」し、「台湾海峡の平和と安全の重要性」が強調されました。「声明」で示された米軍の軍事行動のいくつかは、すでに横須賀を拠点として、繰り返し実行されています。

　たとえば「航行の自由」作戦。私たちが確認した2020年の同作戦は11件。うち7件が横須賀母港艦船でした。

　「台湾海峡の平和と安定」に関しても、2020年、12件の台湾海峡通過が確認され、9件は横須賀母港艦船です。

　2月に横須賀に配備された「ラファエル・ペラルタ」の2020年半年分の航海日誌には、ほぼ毎月対中国のオペレーションが記録（11回も！）されています。

　「ラファエル・ペラルタ」に続く新鋭艦の横須賀配備は、いたちごっことも言える軍拡競争を招き、新たな緊張をアジア太平洋地域に作り出しています。

　「米中両軍の偶発的な衝突が現実味を増してきた」（神奈川、2020.8.29）と報じられるなかで、横須賀へのイージス艦の追加配備が続いているのです。

●

　垂直発射管を有し、動くミサイル発射システムであるイージス艦は、先制攻撃用に開発された巡航ミサイル・トマホークを、実際の戦争でくり返し発射し続けてきました。

　湾岸戦争とイラク戦争。ふたつの戦争の火蓋を切ったのは、横須賀母港のイージス艦でした。湾岸戦争は「バンカーヒル」と「モービルベイ」。イラク戦争は「カウペンス」と「マケイン」。ともに横須賀母港のイージス艦が、トマホークを発射して戦争が始まっています。

　現在も、浦郷弾薬庫から運び出されたトマホークが、横須賀母港のイージス艦に装填される現場を、私たちは何度も目撃しています。横須賀基地は今もなお、先制攻撃の出撃拠点として機能しているのです。

●

　なによりも強調しなければならないことは、こうした先制攻撃による軍事力の投入が「平和」を遠ざけ、より大きな混乱を作り出りだしているという事実です。欧米諸国が過去数十年にわたって繰り返してきた空爆や地上戦が、夥しい数の中東の市民を犠牲にしてきたことが、今日の「テロの脅威」を呼び込んでいます。

　アフガニスタンからの米軍の撤退が大きなニュースとなっていますが、莫大な戦費と多くの兵士の犠牲があったアメリカの軍事力の投入は、何を残したのでしょうか。今、私たちに求められていることは、軍事力は平和をもたらすことができず、新たな憎しみと混乱を招いただけ、という事実を直視することではないでしょうか。

　こうした現状を冷静に見れば、「ミサイル防衛」という名目で行われている横須賀基地の強化を、黙って見過ごすことはできません。国際法に反する先制攻撃をくり返してきた横須賀のイージス艦。その能力がさらに強化されることを容認できる理由が、どこにあるでしょうか。

●

　米国のINF全廃条約からの離脱によって、米国の対中国ミサイル網の計画が明らかになっています。INF全廃条約は陸上発射の中距離ミサイルのみが対象で、横須賀配備のイージス艦に搭載されている海上発射の中距離ミサイル・巡航ミサイル「トマホーク」は野放しとなっていました。横須賀母港のイージス艦の垂直発射管の総計はすでに1000基を超えているのです。

　横須賀を見れば、米国の対中国ミサイル網計画は、「これから」の問題ではなく「すでに実施されている」問題であることがわかります。力による対決を象徴する、中距離ミサイル配備という観点からも、横須賀基地のイージス艦の配備の危険性は明らかです。

●

　新型コロナの感染症拡大は、私たちに本当の安全保障とは何かを問いかけています。気候変動や感染症などにどう対応するのか。こうした「人間の安全保障」を前にすれば、武器を突き付け合う「軍事による安全保障」が、時代遅れで途方も無い無駄遣いであることは、容易に理解できるはずです。

　いまこそ軍事支出を削減し、医療・福祉、気候変動対策等に転用し、そうした努力の成果と情報を共有するなかで、信頼関係の醸成を図ることをこそが、安全保障の名に値すると思います。

　私たちは、横須賀基地へのイージス艦追加配備を中止し、原子力空母も含むすべての艦船の米本国への帰還を求めます。